

雲南懇話会の概況と 1989 年当時の梅里雪山山麓ス農村と明永村

雲南懇話会代表・筑波大学名誉教授 安仁屋政武

雲南懇話会の沿革・概況

雲南懇話会の発足は、1991 年 1 月に発生した京都大学山岳会（AACK）による日中合同登山・梅里雪山（6740 m）での 17 人（日本側 11 人、中国側 6 人）の雪崩遭難事故に起因しています。梅里雪山は雲南省（Ph1）の最高峰のとても美しい山で、ティベット仏教の聖山の一つです（Ph2）。会員小林尚札さんの長年にわたる献身的な遭難者の遺体・遺品搜索活動を通じて現地との日中相互理解が深まる中、これを核として AACK の新しい活動の地平を拓こうではないか、ということで関東在住会員の有志が集まり 2004 年 12 月に会が発足しました。そして、翌 2005 年 3 月に東京神田の学士会館で第一回の懇話会が開催されたのが始まりです。

それ以降、年に 3~4 回のペースで今日まで続いています。毎回の演者は 4~5 人で、大学・研究所などの学識経験者、その道のエキスパート、登山家、旅行家、趣味愛好家など幅広い人材からなっています。その数は複数回の発表者を含めて現在までにおよそ 243 人に上ります。話題の対象地域は、雲南を中心とした東アジアが主ですが、世界にまたがっています。アフリカ特集、南米特集などに加え、南極・北極の学術的な話も多くありました。トピックスはかなり高度な学術的なもの、それらをかみ砕いたもの、登山・トレッキング・秘境の旅行の経験談など、非常に多岐にわたっています。講演毎の演者・演題は、広い意味で山が関係するものと学術的なものをブレンドして、ユニークな会になるよう努めてきました。

会の運営は現在、京大山岳部関係者に加え、趣旨に賛同するさまざまなバックグラウンドを持つ方々により行われています。この会は会員制ではなく、基本的に会毎の聴衆者からの参加費で経費を賄っています。会場は AACK 会員の助力で、2 回目からは市ヶ谷にある JICA 研究所の素晴らしい国際会議場を可能な限り利用させて戴いています。このような流れの中で、当初、発足 15 周年という節目の 2020 年 5 月に、今までのご支援に対する感謝の気持ちを含めてルーツのある京都大学で開催する予定でした。しかし、新型コロナによる緊急事態宣言が発出されたため、2 回の中止・延期を経て今回（第 54 回）の開催となった次第です。

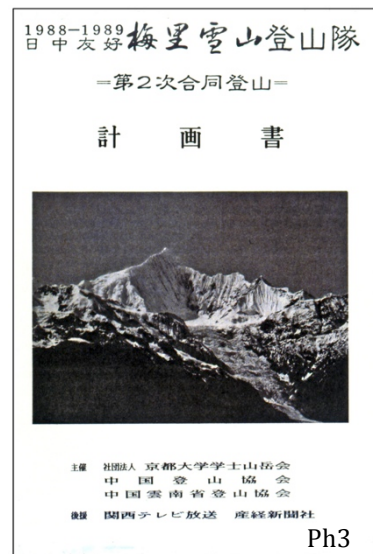
懇話会は HP（www.yunnan-k.jp）を持ち、講演要旨の紹介、関連サイトへのリンクなど、詳細な活動報告を行っています。これに加えて、年間の講演の中から講演者の協力を得て 4~5 編の報告・論文を京都大学のフィールド科学の分野が年に 1 回発行している「ヒマラヤ学誌」に投稿するなど、学術活動にも貢献しています。

さらに以上のような座学の他に、現地を訪れるフィールドワークも実施してきて、現在までに雲南を中心に、ネパール、タイなど 15 回を数えます。

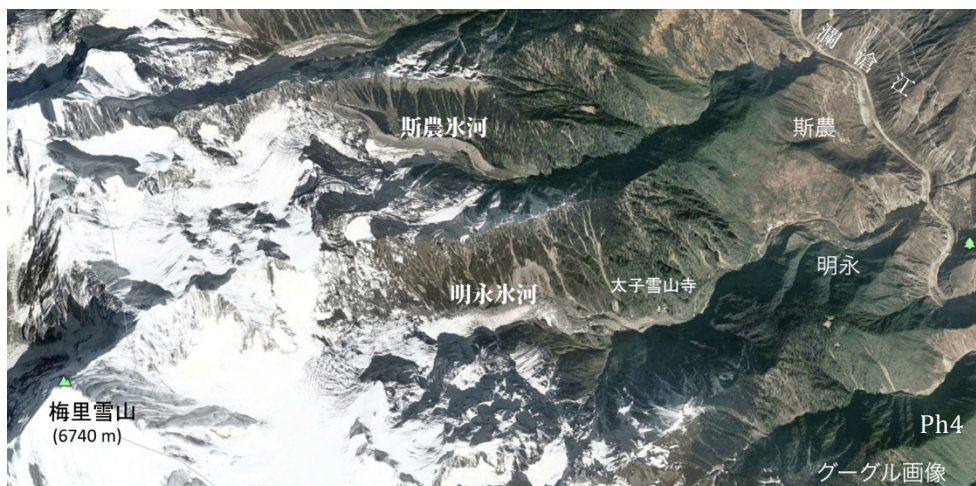


梅里雪山山麓の村

演者は1988—89年AACKの日中友好梅里雪山登山隊第2次合同登山(Ph3)に学術隊員として参加し、1989年10月から11月まで麓の斯農(Sinong)村と明永(Mingyong)村を訪れました(Ph4)。両村ともティベット族が住む村です。私の学術調査対象は、梅里雪山から流れ出る2つの氷河(シェンチェンバオ氷河—現在はス農氷河、ライロゴル氷河—現在は明永氷河)と(氷河)地形でした。登山隊のBH(Base House)が置かれたス農に滞在し、さらに氷河の下流に位置する明永村を歩きました。おそらく1989年当時の両村はそれ以前の数百年間と基本的には変わらない生活様式だったと推測できるので、エピソードを交えて当時の姿を紹介します。当時、村ではカメラを持っている人はいなかったので、写真はとても貴重でした。私は隊のポラロイド・カメラを持っていたので、ス農ではことある毎に自分を撮ってくれとせがまれました。



私達が村を訪れた10月から11月は、丁度トウモロコシが実り収穫される時期だったので、さまざまな農作業を観察することが出来ました。もちろん全てが手作業で、両村で見た機械は中国製の壊れた脱穀機1台だけでした。刈り取り、脱穀、施肥などの農作業は女のみ、男を畑で見たのはピオニュー(ヤクと牛の雑種)で土を起こす作業の時だけでした。



この地域は、2003年に「三江併流保護地域」の一部として世界自然遺産となり、観光化の波が押し寄せました。加えて2009年に制定された中国の国立公園制度により「梅里雪山国立公園」

となりました。特に、明永氷河へのアクセスポイントとなった明永村は著しい観光地化で劇的に変化しています。

ス農村

梅里雪山と瀾滄江(メコン川)を挟んで対岸にある飛来寺でラマ僧による登山の無事を祈願した後、ス農の村に入りました。この村は瀾滄江右岸の南北に延びる河岸段丘の上にあります(Ph5)。原地形は、背後の斜面が馬蹄形であることから、巨大な深層崩壊/地すべりの堆積面で、その後瀾滄江によって河岸段丘となりその上に背後の斜面からの侵食・崩壊による土石(コルビウム)が厚く堆積して現在になったと考えています(Ph6)。



従って、段丘はかなりの傾斜となっており、畑は全て段々畑で段の所にはザクロ、イチジク、リンゴ、みかん、など実のなる木がたくさん植えられています。とてもきれいな印象でした。村の長老の話では、ス農は53世帯からなり600年前頃下流の村から移住してきて作られたとのことでした。集落は大きく2つ、上村

(南-Ph5で向こう)と下村に別れていて、BHは車でアクセスできる下村の北にある大きなハーブ園(宗文才所有)に作られました。学術隊員には歯科医(岩坪吟子、今西秀明)が2人含まれていたの、村で診療所が開かれました(Ph7)。最初にやってきたのは写真に見られるように好奇心旺盛な子供達でした。時間が経つにつれて地元はもちろん、話を聞きつけて近隣の村からも大勢が1日ばかりで診療にやってきてとても賑わい、住民達の交流・溜まり場となりました。

この村で一番目についたのは集落背後の斜面を横切る用水路です。生活用水・畑の灌漑用水など全ての水利用を賄う文字通りの生命線です。ス農氷河から流れ出る支拉(Zula)川から延々と運び、斜面から落として配水しています。落とす所には水車小屋が4段並んでいますが、水車は見慣れている車輪型ではなくタービンです(Ph8)。ここでトウモロコシや麦類などを挽いています。用水路はほとんどがオープンで、各家庭には木をくり抜いた半円形の樋で配水され、貯水槽に貯めて使います。村は牛、ピオニュー、羊、豚など家畜が自由に歩いているのですが、彼らの糞はタイミングが悪いと道を横切っているオープンの用水路の中に落ちます。ある時、BHの近くで目撃したので、糞を追って行ったらなんと我々が滞在しているBHの貯水槽に入って行きました。その晩、牛の糞が混ざっている水で調理した料理を食べているのかと思うと、複雑な気持ちでした。

この地域はサボテンが生育するほど乾燥しています。乾燥地域にあるティベットの家は屋根が平らで泥を固めて葺いているので雨に弱く、大雨の時にはしばしば雨漏りしました。それで、ブルーシートを屋根にして外に寝ることも多々ありました。滞在中、10月17~19日の3日間土砂降りの雨が降り続き、瀾滄江沿いの車道の斜面は至る所で崩壊し、車の通行が不可能となりました。徒歩で行き来する現地の人達にはたいした影響はありませんでしたが、車を持ち込んだ隊は帰る時が大変でした。近隣の村々から大勢の人が出て、全てシャベルとクワの人力で





撤収の 11 月 16 日までになんとか車が通れるようにしてくれましたが (Ph9)、隊員達は歩きました。この豪雨で近隣の村々では屋根の損壊など多くの被害が出たそうです。後で聞いたところでは、聖山を登ろうとした行為に対する神罰だという話が流れたそうです。

斯農では 11 月 2 日に村役場で村祭り？が開かれ、BH に滞在していた我々も招待されました。この日のために羊一頭が屍殺され、村役場の台所では朝から料理が始まりました。午後から三々五々集まり始めましたが、住民は皆ティベットの民族衣装で着飾って来ました。我々も用意してくれた民族衣装を借りて着飾りました (Ph10 左)。晚餐の食事はまず男衆に振る舞われ、次に女衆に振る舞われました。酒は青稞麦から自前で作った青稞酒です。食事の後、村長・有力者からスピーチがあり、その後は焚火の周りでダンスに興じました。男衆と女衆は別々に踊ります (Ph1 中、右)。若い男女にとって出会い、知り合う楽しい貴重な機会なのでしょう。



さらに、11 月 15 日には結婚式が行われ、見物が許されて貴重な体験を撮ることができました。いわゆる“式”なるものではありませんでした。最初は、新婦の家の一階の屋根上で新婦と家の関係者、村人達が集まり別れを告げる饗宴で (Ph11 上)、我々もご相伴にあずかりました。青稞酒と食事はスープ、チーズ、饅頭、ご飯、羊肉、プレッツルみたいなもの、などでした。上の写真は左側の父親など男衆が居並ぶ前に花嫁（向こう側）が付添いと座り別れを惜しんでいるところです。後ろには（関係する？）女衆が座っています。その周りには見物人が立っていました。花嫁と付添の脇にあるいくつもの深いソースパンは結婚祝いです。男衆からは祝儀を集めていました。参列者にはパーパー（円いナンみたいなもの）、チーズ、羊の干し肉片などが引き出物として配布されました。そして、父親（帽子を脱いで、白いカタを手を持っている）と最後の別れをした後 (Ph11 下)、付添と共に新郎が待ち構えている家に行きました。家の玄関で新郎が新婦を迎え入れます。ここで新婦側の人達は帰りましたが、我々は新郎の家にも入

れて貰いここでもご馳走で歓待を受けました。新婦は 27 才、新郎は 22 才とのことでした。この時撮った写真は、翌年の（遭難した）登山隊は別の集落に行ったので、託して渡すことが出来ませんでした。しかし、2014 年明永村のチャシさんが日本に来たとき、新郎新婦のプリントを届けるようお願いして託しました。

当時の村全体の写真とグーグル画像を比べて見ると(Ph5 & 6 参照)、家の配置や畑の輪郭にはほとんど変化はありません。が、一つだけ大きな違いがあります。それは車が入る道路です。現在は最奥の所まで道路が出来ています。これによる物資の輸送などが便利になり、村の生活はかなり近代的になったと思います。当時接したス農の人達は、BH の大家さんを始め皆やさしく親切だったのが強く印象に残っています。

明永村

明永村は明永氷河から流れ出る明永川右岸の河岸段丘の上に位置しています(Ph12)。瀾滄江との合流点付近は急斜面の峡谷となっているので、1989 年当時車道はなく徒歩でしか入ることができない集落でした。明永川沿いの車道で村まで入れ一大観光地となっている現在では想像できないでしょう。写真に見るようにとても美しい村です。

私は、明永村には明永氷河と氷河地形調査のため、

10 月 21 日に偵察を兼ねて太子雪山寺(Ph13)まで日帰りした後、24 日から 27 日まで食料とテントをガイドと馬に持たせス農から峠を越えて 1 人で行きました(Ph14 左)。当時、この辺り帯（大理以北）は外国人立入禁止区域だったのに加え、天安門事件（6 月）の後だったので、外国人の行動は厳しく監視されていました。それでテントは村から離れた上流側、比較的目に



つきにくいところに張りました。Ph14 右は 2005 年に似たようなアングルで撮ったもので、矢印は同じ橋を示しています。テント場は橋の上流でした。そして峠を越えた BH との安全確認の無線交信のために、そばの土壁の上にアンテナを立てました。この時、たまたま上流から小柄な若者（に見えた）が狩から帰る途中通りかかり、アンテナを立てるのを手伝ってくれました。その後、太子雪山寺にお参りする巡礼者(Ph15)には何人か遭遇しましたが、彼は明永村で私

が接触した唯一の人間でした。2014 年 4 月明永村の村長チャシさんが AACK の招待で来日した時この話をしたら、それは自分で良く覚えている、ということでお互いに驚きました。因みに彼の娘ペマツォモさんは AACK 会員の援助で日本に留学し、京大山岳部 OB と結婚して日本に住んでいます。

明永村も段丘面の傾斜がきついので下流の一部を除き段々畑で、段の所には斯農と同じように木が植わり、木陰を供給しています (Ph12 参照)。当時、全く 1 人で調査に歩いていました



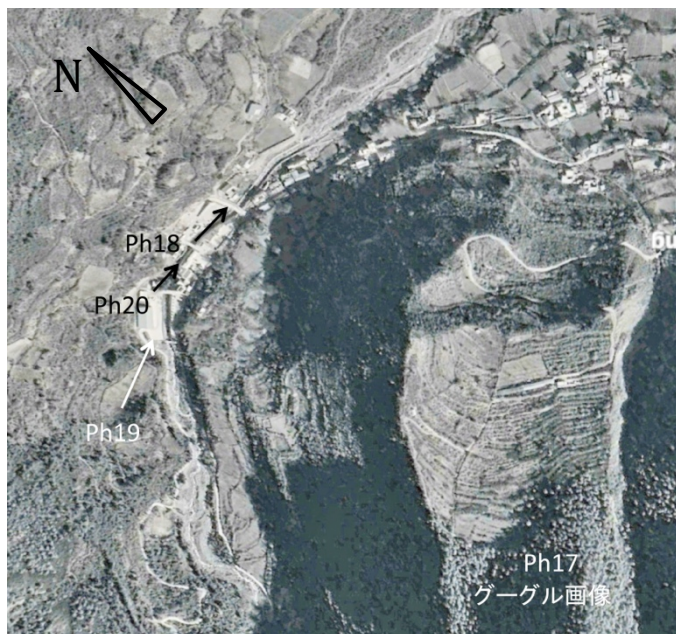
が、下手に歩くとスパイと疑われ拘束される可能性やその他の不愉快なことが起きる可能性を排除できなかったなので、できるだけ家屋を避け村の中は人目につきにくいように歩きました。それで、氷河地形のない下流方面には行きませんでした。自由に歩き回った斯農とは大きな違いでした。



2005 年に訪れた時、その変貌振りには驚きました。車に乗って舗装道路で村の中心まで入れる、太子雪山寺まで馬で行ける、そこには宿泊設備がある、そこからはびっくりするような鉄製の回廊が氷河の見晴台まで続いている (Ph16)。回廊は 2002 年に建設されたとのことでしたが、翌 2003 年には世界自然遺産になりました。このような大規模な観光用の人工施設のあるところが世界自然遺産に指定されたとは意外で驚きでした。その後、2009 年には中国の国立公園に指定されました。梅里雪山はカイルスと並ぶティベットの聖山なので観光地としてとても人気があり、現在はますます観光地化が進んでいることでしょう。それに伴い、村人達の生活もがらっと変わっていることでしょう。観光客相手の仕事が増えている現在、村の若者は昔ながらのきつい農作業をやっているのだろうか、と思わず思いました。グーグル画像で見る限り畑の大部分は健在なので、ある程度機械化されただろうけれど、基本的には昔と変わらない作業をやっているのでしょうか。



以下は観光開発された場所の 1989 年と 2005 年を比べた写真です。1989 年当時、まさかこのような観光開発が行われるとはもちろん想像もしませんでした。たまたま地形と直接関係ない写真も撮っていたのが功を奏してこのように直接対比が可能となりました。開発された場所は集落の西端、段丘が終わり谷が狭くなる場所から上流側です (Ph17)。村の道路沿いには



宿泊施設、土産物屋などが並び (Ph18)、
 終点には大きな駐車場も作られています
 (Ph19)。また、川も一部ですが護岸が作
 られています (Ph20)。Ph17 にこれらの
 写真のおおよその撮影位置を示していま
 す。グーグル画像では観光施設付近の川
 筋は、ほぼ護岸化されているのが認めら
 れます。Ph19 の橋を渡った所に観光用の
 馬の溜まり場がありましたが、ここから
 少し上流に行った所が 1989 年に私がキ
 ャンプした場所でした (Ph21)。土壁の一
 部が残っていたので分かりました。写真
 に見るように、目に着きにくいような大
 きな岩陰で道から外れた所に張りましたが、
 監視されていたので場所はすぐに知られ
 たようでした。その結果、当時、日本人





が珍しかったので、テントの周りには老若男女数人が朝夕陣取り、私がテントから顔を出すのを待っていました。そして、炊事などで顔を出すたびに指さし囃したてて大笑いしました。動物園の猿の心境はこんなものなのだろうか、と思ったものです。

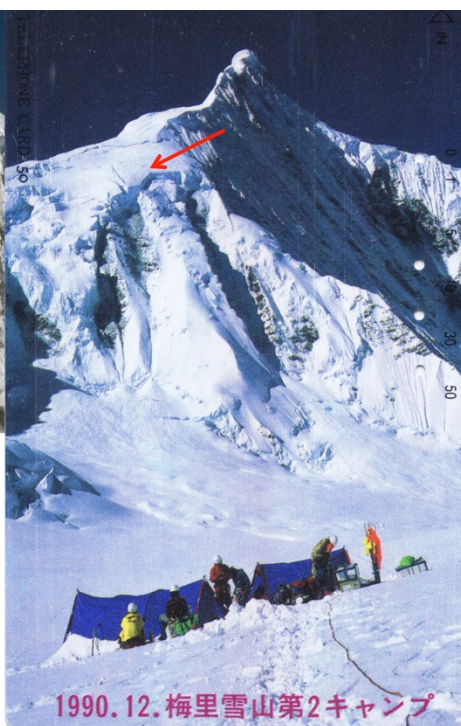
次の2枚の写真(Ph22)は太子雪山寺の近くから撮った明永氷河の変化を示したものです。16年間で氷瀑の所が大きく後退、氷瀑下の氷河表面高度が下がっているのもよく分ります。左の写真ではるか奥に見えるピークが梅里雪山の頂上です。



最後の3枚組の写真は似たようなアングルで、頂上から南東へ延びる尾根が切れる周辺を示しています。中央の写真はご遺族が作成したテレフォンカードのもので、回収されたカメラに写っていた貴重な写真の一枚です。キャンプは何かのんびりした雰囲気を感じ取られます。アタック態勢を取る前の一時でしょうか。赤い矢印の所に注目して下さい。真ん中の1990年の写真では氷河の下が切れ落ちていて氷壁となっています。1989年のものでは落ちていなく滑ら



かな急斜面です。2005年では氷壁は若干残っていますが、下の尾根の形状はかなり変わっています。地形からこの周辺の氷河と氷雪



の状態は頻繁に変化していることが窺えます。多分この周辺のどこかが崩れて大規模な雪崩が発生したのではないかと推測できます。

(完)